



発行所
 県立芦屋高等学校
 出版部
 兵庫県芦屋市宮川町6-3

二面……………アメリカ力村取材
 三面……………昔と現在の芦高の比較
 (アンケート調査)
 四面……………出版部座談会
 (夏休みを終えて)

同世代は今

ろうあ者との架け橋

—手話サークル—

青春—同世代の若者たち—。このテーマをもとに我々出版部は、ボランティア活動をしている同世代の目を見て見た。一つは手話サークルで活躍している人、もう一つは「あしや村」のワーカー。どちらも我々と少し違った立場ではあるが、一つの事に打ち込む若者として、色々な話が聞けた。

手話……ろうあ者の言葉。劇、手話の講師、機関紙の発行、ろうあ者の色々な行事参加などをして、私達の取材に応じて下さったのは、関西学院大学の三回生、田上一嘉さん、津路勢さんの二人。田上さんは、芦高のOBで二十四回生である。二人とも同世代で、週に一度芦屋の老人福祉会館の一角で勉強会を開いている。他にもボランティア活動として通訳、手話サークルの成り行きで飛び交っている。彼らもボランティア活動には多少問題があるように思われる。おそろく、悪い出席率に悩まされている苦肉の策だろうが、どのクラスも展示に参加させるのは、原簿展や、講演が催され、それが新聞等にも紹介されたりして、かなり大がかりなものだった。昨年、大きなものに挑戦しただけに、今年の記念祭も再び注目を浴びるかもしれないが、それがプレッシャーにはならないか、と噂された。今年、身近なテーマ「春」が選ばれた。しかも、アンケート調査など細かい配慮がなされたという。強制参加ではないだろうか？この全員参加の件は、代議員の間では承認されたのだが、なぜその前に、参加者である一般生徒の意見を聞かなかったのか。(出された案はほとんど承認されたという造紙に書いて展示。こんな

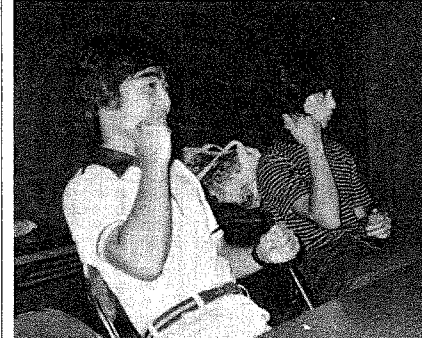
自治会展を考える

「強制参加ではないだろうか？」
 「この全員参加の件は、代議員の間では承認されたのだが、なぜその前に、参加者である一般生徒の意見を聞かなかったのか。(出された案はほとんど承認されたという造紙に書いて展示。こんな

部に人も多く、また確立しないうえ、興味程度にやっていた人達に対しては、「片手間で参加していい、でも中途半端にならないように」と積極的に近づいてほしいというところだった。大学のサークルではまだ、ボランティアとは言えない状態だそう。同世代の人達に対して何かありませんかという質問に対して、「何か一つ、真険に取り組んでおられたらいいかな」とも言われた。

山に生きる若者達

—芦屋村ワーカー—



左：田上さん 右：湊さん

野口さんは、大学に入ってから、芦屋村のワーカーになった。今年で三年目になる。仕事で楽しかった事、良かった事は、人付き合いが良くなり、知り合いが増えた事である。苦しい、山で車を走らせる、山でフォークリフトを動かすなど危険な物が落ちていたら拾うなど、挙げればきりが無い。シーズンオフも仕事があった。冬場の道の整理をしたり、生ゴミをためる穴を掘ったりするなどなかなか忙しいのだ。芦屋村を利用しての事がある人を知っていたと思うが、ゴミをためる穴がある。だいたい一年間

☆街頭質問☆

今の高校生は、世代的違う人々の目によりに写っているのだろうか。そんな疑問から、我が出版部では、去る八月三日、芦屋の商店街を通る方々を対象にインタビューを試みた。
 Q1 今の高校生の服装、態度、言葉使い、礼儀などに、直接関係がないのであまりわからない。
 ・良い人もいれば悪い人も、全体的に悪い。
 ・全体的に悪い。
 Q2 今の高校生の金銭感覚についてどう思われますか。
 ・わかりづらい。自分達のことに使っている。無駄使いが多い。
 ・自分でアルバイトをして、自分ではいい。
 Q3 昔の高校生と変わった所はありますか。
 ・解放的になっている。例えば先生と生徒の間がなくなっている。
 ・わからない。
 ・自己主張が出来ている。
 ・異性関係などが派手。
 ・自立心が無い。
 ・自由のほくろがある。
 ・積極的では無い。
 Q4 あなたと高校生との間に多くの隔りがあると思いませんか？
 ・あると思います。
 ・別にそんな事はない。
 ・そんなに感じない。
 ・社会情勢による。
 ・わかりません。
 ・感覚の相違を感じる。
 最初質問に対して、「全体的に悪い」というのが予想以上に多く(インタビューの服装、礼儀が多少影響していたかとも聞かれた)本人にとっても気がならない態度、礼儀でもやはり問題があるようだ。しかし一方で「全体的に悪い」という差があるのも個人によってもあるのではないかと、服装、金銭面では昔と比べるとやはり派手になったように感じました。時代の流れによって変わってきたのだらうか。

なかつた。やはり小さい子供が多いので、言う事を聞いてくれない時があり困る。雨降った時などは地面が濡らくなるので、テントが濡れたら大変。滑ったりしたと言っていた。今やわかっていて一番しんどい事は、やはり勉強と両立させること。林君はジュニア・ワーカーで、同世代の人は二人ぐらいいる。何の目的で芦屋村のワーカーになったのか聞いてみると、林君は今まずジュニア・ワーカーの仕事をやってみたいからと言っていた。洗い終わった後の食器のチェックだそう。これは、

アメリカカ村・その素顔

我が出版部は八月二十五日、合宿先の和歌山県日高郡美浜町にあるアメリカカ村取材した。南に太平洋の荒海、三方は山に囲まれた地形のため農業漁業ともあまり盛んではなく、貧しい暮らしから、村を挙げて移民した人々の生活を探ってみた。

中津さん宅

中津さんは大正五年(二十七年)の時にカナダへ渡り、結婚した。当時は、写真結婚が普通とされており、中津さんの場合もそうである。

夫は鮭漁をしていたが、魚はいつも採れるというわけではなく、三人の子供を育てるためには、生活は苦しかった。そのため、女の子は親戚の人に養女に出してしまつた。

結婚して八年目で、夫を亡くした。漁に出たまま戻らなかつたらしい。避難したところだった。このとき、死体は浮かんでこなかつた。

その後中津さんは、二人の息子を日本にいた姉に預けた。病院の院長の家で働いた。ある日、院長の奥さんは、息子のハーリーが巻きたばこを持っているのを見つけた。奥さんは、「ハ」

を近くの農業協同組合で買つた。中津さんは「ハ」のだから驚く。こんな所にも外国生活の片りんが伺える。

橋本さんは尋常小学校を卒業して、大阪の方で仕事をされていたが、指の病気のたまり三尾に居られた。また、十五歳の頃に菅屋の山手や、御影の方に住んでおられた。

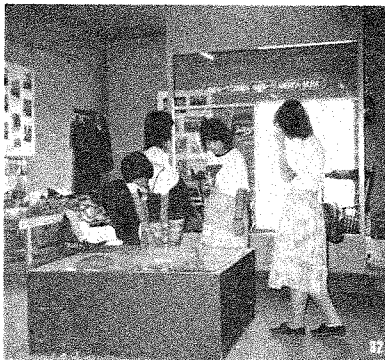
十七歳で結婚した後、すぐにカナダへ。若いというよりも、渡つてすぐは、店など働くことができない。食事を用意する仕事だ。たまたま、その時の苦勞話を聞くと、橋本さんは、御

田のお金に替える。いすに座って、テレビを見ながら編み物をしているのが、一番楽しいと言つた。中津さんの顔からは、一人暮らしの寂しさを、一人暮らしの救いなどを、お話を途中で口をついて出る英語の発音の良さに、現在九十三才というお年を感じさせない。中津さんは、尋常小学校は四年しか行かず日本語はあまり書けないが、英語なら通訳はいらないとのことだ。

水敷さん宅

水敷さんは、明治十四年生まれて、今年百才といふ元氣な方である。明治三十四年、二十才の時カナダに渡つたが、この頃和歌山県からは多く移住できなかったため、神奈川横濱から船で出発し、十六日かかってビクトリアに着いた。

一方奥さんは、カナダへ渡る前に、水敷さんと写真結婚をした。当時カナダに渡る女の人は、写真結婚をして生活をされた。週に



写真は資料を見る出版部員

橋本さん白く、「白人は、みんなとも親切だったよ。」カナダでは、バラックのような家に住み、裏ではインディアンがきれいなカーペットを編んでおり、そのインディアンが夜になると「ハッハッ」と言っている。したがって、当時から来た橋本さん、当時の水敷さん、移住した人々が、インディアンを恐ろしく思つた。大さな荷物を積み上げて、インディアンが入ってこれないように戸をふさいだらしたそうである。(建はなかつたのか)

それでも、カナダは豊かだったので、住むんだから向こうの方がずつといくねえと、橋本さん。また昔の生活を懐かしんでおられるようだった。

武内さんは大正七年、当時二十歳の頃から二十三年間に渡つてアラスカで暮らし、移民の理由は村全体が貧しかったためである。アラスカでは、鮭漁をしては、それが怖かつたらしく、大さな荷物を積み上げて、インディアンが入ってこれないように戸をふさいだらしたそうである。(建はなかつたのか)

向こうの生活で困つた事と言つたりは、言葉の違ひだった。しかし働いていく中で少しずつ覚えてきた。武内さん。さらにはカナダでは有色人種排斥であった。

土山さん宅

我々のグループが取材したのは、土山さんの家であった。土山さんは、明治三十二年生まれ。現在八十五才だ。

一世の日本は、長期出張として日本に帰つていく人が多いが、二世三世になると、カナダに永住している人も数多い。住は慣れた土地の方が住み易い、税金が安い、養老年金も多いなどが理由と言ふ。

カナダは世界各國からの人々が移住してきた国である。その中で日本人は、元來の眞面目さ、勤しんで働いた功績を残して、現存がカナダの首相クラスは、日系人が占めるそうである。また、日本の文化も、年々見直されていく。

どん海を渡つた。一世の日本は、長期出張として日本に帰つていく人が多いが、二世三世になると、カナダに永住している人も数多い。住は慣れた土地の方が住み易い、税金が安い、養老年金も多いなどが理由と言ふ。

カナダは世界各國からの人々が移住してきた国である。その中で日本人は、元來の眞面目さ、勤しんで働いた功績を残して、現存がカナダの首相クラスは、日系人が占めるそうである。また、日本の文化も、年々見直されていく。

ともなつたそうである。三尾の人々は武内さんに限らず、物心ついた時から皆、行けるものならカナダへ行きたいと思つてきた。そのく、当時の生活は、ひどかつたらしい。

カナダから持ち帰ったお金の価値が低くない。いろいろな道具は明治の生活のために、全て売ってしまつたそうである。

武内さんは、結果としてカナダへ移住した事は成功だった。後戻りしなかつた。その頃は日本にいても十分案に暮らさなかつた。

取材を終えて

我々はアメリカカ村の方々から、移民の時の苦勞話を聞くつもりだった。そんな話ばかりなと思つたから、どこか聞いた話といえ、白人が親切だったこと、英語を知らなくとも不自由しなかつたこと、得來カナダで生活して行く子供たちが国家に悪感情を抱かぬようにした事だ。

「アイデンティティ」の危機だと言ふ。移民の裏には「人種」という大きな壁があったのである。(そう言ふは、公共施設のあちこちに、「人種差別をなくす」と書かれたポスターが貼つてあるのを見出す)

「アイデンティティ」の危機だと言ふ。移民の裏には「人種」という大きな壁があったのである。(そう言ふは、公共施設のあちこちに、「人種差別をなくす」と書かれたポスターが貼つてあるのを見出す)

「アイデンティティ」の危機だと言ふ。移民の裏には「人種」という大きな壁があったのである。(そう言ふは、公共施設のあちこちに、「人種差別をなくす」と書かれたポスターが貼つてあるのを見出す)

「アイデンティティ」の危機だと言ふ。移民の裏には「人種」という大きな壁があったのである。(そう言ふは、公共施設のあちこちに、「人種差別をなくす」と書かれたポスターが貼つてあるのを見出す)

「アイデンティティ」の危機だと言ふ。移民の裏には「人種」という大きな壁があったのである。(そう言ふは、公共施設のあちこちに、「人種差別をなくす」と書かれたポスターが貼つてあるのを見出す)

「アイデンティティ」の危機だと言ふ。移民の裏には「人種」という大きな壁があったのである。(そう言ふは、公共施設のあちこちに、「人種差別をなくす」と書かれたポスターが貼つてあるのを見出す)

「アイデンティティ」の危機だと言ふ。移民の裏には「人種」という大きな壁があったのである。(そう言ふは、公共施設のあちこちに、「人種差別をなくす」と書かれたポスターが貼つてあるのを見出す)

現在の芦高にも多くの問題点があるように、昔の芦高にも、いろいろな問題点があったはずである。どのような問題点があったのか、また、そのような問題点にぶつかった時、どんな解決策を考えていたのかなどを、過去の芦高新聞から取り上げてみた。

昔の芦高生にも、「三無主義」の風潮があったようだ。しかし、この数十年間、毎年無気力で芦高生活をかかってきたわけではなはいはずである。時には、学校や執行部の方針に反対した事もあったであろう。ここで一つ、答辞事件というものを目を向けてみたい。

で、問題の答辞を朗読。次の日、執行委員会主催の芦高をよくなる集い」に於いて、生徒が答辞に対してどう考えているのか、意見を求めた。その次の日生徒集会で、答辞の疑問点を出し合う。話はこれからどうしていきまきなのか、という所まで発展。数日後の生徒集会では教師も参加し、日頃不満に思っていることを出し合うといった形で週日に渡って話し合う場がもたれている。最後の生徒集会では

事件後の芦高は……

約五百名の生徒が参加している。今の芦高では、考えられない程話し合う機会が多い。しかもそれは、生徒自信の手で……。さらに、その機会を十分に活用している。ムダにつぶしてはいないのだ。

昔の無気力さと、今の無気力さ。一見同じようだが何か違うように思われる。昔の芦高生には、自治会活動にしろ、学校行事にしろ、他人事にはしていない。何かあると、

れば自分達の手で何とかしようというものが行動の中に感じられる。しかし現在の芦高生はどうだろうか。「誰かがやるだろう」という考えがあるが、不満を行動に移せず力を含ませたという事も忘れてしまっているのではないだろうか。

なぜこの様な違いが表れたのか。この違いは、学校・自治会行事に影響を及ぼそうとしているのである。昔、記念祭は七日制であった

が現在は五日に減らされていく。また修学旅行、自由参加のスキー旅行なども今は姿を消している。

昔の芦高生をふり返って今の芦高生が、どのよよに変わったのか。その様子を歴史をふまえて、どの様な態度でこれからの学校生活に臨めば良いのだろうか。

〈昔のアンケート結果〉 (無回答は省略)

- Q1 この学校で尊敬する先生がおられますか?
はい 28.8% いいえ 71.2%
- Q2 この学校に嫌いな先生がおられますか?
はい 78% いいえ 22%
- Q3 先生に相談をもちかけたことがありますか?
はい 28.9% いいえ 71.1%
またそれはどんなことですか?
(・勉強のこと ・クラブのこと ・人間性のこと ・恋愛など…)
- Q4 授業内容を自分なりにどう思いますか?
ア) 十分ついていける 6%
イ) しんどいがついていける 23%
ウ) 少し油断するについていけない 54%
エ) さっぱりわからない 14%
- Q5 毎日の予習、復習はしていますか?
はい 20% いいえ 19% (時々 57%)
- Q6 高校生活は楽しいですか?
はい 55% いいえ 35% (普通 10%)
- Q7 高校生活において、真の友情は得られ、育つと思いますか?
はい 70% いいえ 10%
- Q8 自治会活動に関心がありますか?
はい 38% いいえ 62%
- Q9 部活動は最初に望んでいたとおりですか?
はい 56% いいえ 44%

昔の芦高新聞を

見ると、芦高生が色々な問題を抱えて話し合った記録や、アンケートの結果などが記されている。そこで出

版部は、現在の芦

高生に全く同じアンケートをとり、その数値の違いから芦高生がどの様に変わってきたかを調べてみた。

自由の危機

〈最近のアンケート結果〉 (無回答は省略)

(無回答は省略)

- Q1 この学校で尊敬する先生がおられますか?
はい 43% いいえ 53%
- Q2 この学校に嫌いな先生がおられますか?
はい 87% いいえ 12%
- Q3 先生に相談をもちかけたことがありますか?
はい 20% いいえ 79%
またそれはどんなことですか?
(・勉強のこと ・生活のこと ・バイトのこと ・女の子のこと)
- Q4 授業内容を自分なりにどう思いますか?
ア) 十分ついていける 10%
イ) しんどいがついていける 18%
ウ) 少し油断するについていけない 49%
エ) さっぱりわからない 19%
- Q5 毎日の予習、復習はしていますか?
はい 22% いいえ 73%
- Q6 高校生活は楽しいですか?
はい 55% いいえ 34%
- Q7 高校生活において真の友情は得られ、育つと思いますか?
はい 68% いいえ 21%
- Q8 自治会活動に関心がありますか?
はい 24% いいえ 71%
- Q9 部活動は最初に望んでいたとおりですか?
はい 41% いいえ 53%

現在の芦高の問題点。数多いた中で一番にクローズアップされるのは、自治会活動に対する無関心さである。

例えは四月以前に行われた自治会役員選挙。一切が延期されたにもかかわらず、土壇場にあってやっと立候補者が揃ったという状態である。しかも、中心となる二年生がたったの三名。立候補しなかつた人まで、無関心というわけではない。しかし、選挙管理委員会による再三の呼び掛けに、「またか」「誰かがするやろ」と、他人頭の子年生が、ほとんどであったのは事実だ。さらに、立合演説会の騒がしき、無効果の多さ。執行部とは連帯感が噛み合わず空回りの現状である。

その上、上げが実施された事にしても、生徒側は結局表立った事を何もせず、執行部がもつと連絡を断つた。教師と生徒、特にその代表となる執行部がもつと連絡を断つた。最下限に留められたかもしれない。

一泊旅行廃止、野外活動の

日短縮縮とも、自治会員と執行部が、一つになって取り組まねばならない事ではないのか。

多くの問題を抱えているのに、それをどうにか知らずか、自治会員は一つ考えずにいる。又、その上に立っている執行部の足並みも、心なしか乱れている様だ。

さらに教育方面のカリキュラムにまで、問題は広がっている。

無気力の象徴

今年の四月から授業の一環として取り入れられた、必修クラブ。これによって、特に文化部の部員数が増加した。各部の幹事は、部内をまとめ、幽霊部員を減らすのに、頭を痛めている。反対に、この制度の設けた学校の設備の不十分さにも驚く。講堂や部室がない不便な状態で活動している部もある。又、一年生の時間割に組み込まれた、ゆとりを確保するの時間の運営は先生に任せられる。また、相談の内容は勉強に関

會員として見つめ直して欲しい。そして、それが一時的なものとならないことを望みたい。

アンケート結果(右表参照) まずQ2の結果を見よう。誰か嫌いな先生がおられますか?という質問は「はい」と答えた人、Q3の「先生に相談をもちかけたこと」がある」と答えた人、共に昔に比べて減っている。先生と生徒のミソは深くなっているようだ。

最後のQ9では、「はい」と答えたのは、わずか二四%。自治会活動が衰退していくのも無理はない。

全体を通して、高校生活を楽しく思っている人が多く、その理由は主に部活動と友達との関係が深く、反対に勉強と自治会活動への興味は薄い。とにかく、人各々に高校生活を楽しくみているようだが、その楽しみ方が自分勝手にならぬ様、心がけたいものだ。(杏)

